

「へえ、。ちや、もう身を投げたものがあるんだね」

「まことに怪しからん事で御坐んす」

「何代位前の事かい。それは」

「なんでも餘つ程昔の事で御坐んすさうな。夫から——これはこゝ限りの話だが、旦那さん」

「何だい」

「あの志保田の家には、代々氣狂が出来ます」

「へえ、」

「全く祟りで御坐んす。今の嬢様も、近頃は少し變だと云つて、皆が嘸よぶします」

「ハ、、、、そんな事はなからう」

「御坐んせんかな。然しあの御袋様が矢張り少し變でな」

「うちにゐるのかい」

〔嘸〕 言ひ騒ぐこと。

「いゝえ、去年亡くなりました」

「ふん」と余は烟草の吸殻から細い烟の立つのを見て、口を閉ぢた。源兵衛は薪を背にして去る。

晝をかきに来て、こんな事を考へたり、こんな話を聽く許りでは、何日かゝつても一枚も出来つこない。折角繪の具箱迄持ち出した以上、今日は義理にも下繪をとつて行かう。幸、向側の景色は、あれなりで略纏つてゐる、あすこでも申し譯に一寸描かう。

一丈餘りの蒼黒い岩が、眞直に池の底から突き出して、濃き水の折れ曲る角に、嵯々と構へる右側には、例の熊笹が斷崖の上から水際迄、一寸の隙間なく叢生してゐる。上には三抱程の大きな松が、若蔦にからまれた幹を、斜めに振つて、半分以上、水の面へ乗り出してゐる。鏡を懐にした女は、あの岩の上からでも飛んだものだらう。

〔下繪〕 繪のしたがり。又は、物の下地に供する爲の繪。

〔嵯々〕 山などのけはしい貌。嵯峨。



三脚几に尻を据ゑて、畫面に入るべき材料を見渡す。松と、笹と、岩と水であるが、儲水はどこでとめてよいか分らぬ。岩の高さが一丈あれば、影も一丈ある。熊笹は、水際でとまらずに、水の中迄茂り込んで居るか、と怪まるゝ位、鮮やかに水底迄寫つてゐる。松に至つては、空に聳ゆる高さが、見上げらるゝ丈、影も亦頗る細長い。眼に寫つた丈の寸法では到底収りがつかない。一層の事、實物をやめて影丈描くのも一興だらう。水をかいて、水の中へ影をかいて、さうして、是が晝だと人に見せたら驚くだらう。然し只驚かせる丈では詰らない。成程、晝になつて居ると驚かせなければ詰らない。どう工夫をしたものだらうと、一心に池の面を見詰める。

奇體なもので、影丈眺めて居ては一向晝にならん。實物と見比べて工夫がして見度くなる。余は水面から眸を轉じて、そろり／＼と上の方へ視線を移して行く。一丈の巖を、影の先から、水際の繼目

〔皴皴〕 シュンスウ。しわ。薛逢の詩「老皮皴皴交縱横」

〔吟味〕 詩を吟じてその意を味ふこと、轉じて、物の味ひを十分に味ふこと。或は、とりしらべること。

〔緑の枝を通す云々〕 以下、畫家の幻覺を描いてゐる。

〔楚然〕 あざやかな貌。〔花下に云々〕 志保田の那美さんを指す。

迄眺めて、繼目から、次第に水の上に出る。潤澤の氣合から、皴皴の模様を逐一吟味して、漸々と登つて行く。やうやく登り詰めて、余の雙眼が今危巖の頂きに達したるとき、余は蛇に睨まれた墓の如く、ぱたりと畫筆を取り落した。

緑の枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の、蒼黒く巖頭を彩る中に、楚然として織り出されたる女の顔は、——花下に余を驚かし、まぼろしに余を驚かし、振袖に余を驚かし、風呂場に余を驚かしたる女の顔である。

余が視線は、蒼白き女の顔の真中に、ぐさと釘付けにされたぎり動かない。女もしなやかなる體軀を伸せる丈伸して、高い巖の上に一指も動かさずに立つて居る。此一刹那！

余は覺えず飛び上つた。女はひらり、と身をひねる。帯の間に椿の花の如く赤いものが、ちらついたと思つたら、既に向ふへ飛び下り



た。夕日は樹梢を掠めて、幽かに松の幹を染むる。熊笹は愈青い。又驚かされた。

十一

山里の朧に乗じてそゞろ歩く。觀海寺の石段を登りながら仰數春星一二三と云ふ句を得た。余は別に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雑話をする氣もない。偶然と宿を出で、足の向く所に任せてぶらぶらするうち、つい此石磴の下に出た。しばらく不許葦酒入山門と云ふ石を撫で、立つて居たが、急にうれしくなつて、登り出したのである。

トリストラム、シャンデーと云ふ書物のなかに、此書物ほど神の御覺召に叶うた書き方はないとある。最初の一句はともかくも自力で綴る。あとは只管に神に念じて、筆の動くに任せる。何をかくか

【不許葦酒入山門】葦は臭菜也。ねぎ。んにく。の如き臭い野菜。葦菜を食ひ酒を飲んだ者は寺の門に入るを許さぬ意。山門は寺院の樓門。即ち寺院を法空涅槃に譬へ、その所入の端緒である三解脱門(空門・無相門・無作門)を寺院の門にたとへ、三門といふ。

【トリストラム、シャンデー】Tristram Shandy. シャンデー一家の生活を叙した小説。ローレンス、スターンの作。

【スターン】 Laurence Sterne(1713-63)

自分には無論見當が付かぬ。かく者は自己であるが、かく事は神の事である。従つて責任は著者にはないさうだ。余が散歩も亦此流儀を汲んだ、無責任の散歩である。只神を頼まぬ丈が、一層の無責任である。スターンは、自分の責任を免れると同時に、之を在天の神に嫁した。引き受けて呉れる神を持たぬ余は、遂に之を泥溝どぼの中に棄てた。

石段を登るにも骨を折つて登らない。骨が折れる位なら、すぐ引き返す。一段登つて佇むとき、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として、吾影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寐ぼけた奥から、小さい星がしきりに瞬きをする。句になると思つて、又登る。かくして、余はとうとう、上迄登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。昔、鎌倉へ遊びに行つて、所謂五山なるも

【寐ぼけた奥】春の朧ろに霞んだ空は奥深く見えるから、かう言うたもの。  
【五山】印度の五精舎に倣うて、禪宗で最高寺格の五ヶ寺院をいふ。鎌倉五山(建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺)と京都五山(天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺)とある。



〔塔中〕 塔頭たふつちう。本寺に隸屬して、其寺院内に在る末寺。  
 〔頭の鉢の開いて〕 後頭部の通常よりも隆起した、大きな頭をいふのであらう。  
 〔かつて〕 全く。

〔庫裏〕 寺厨のこと、又、俗に御堂に對して僧の家族の住む處。  
 〔洒落〕 心のさつぱりとすること。書言故事「春陵周茂叔、人品甚高、胸中洒落、如三光風霽月」

〔屁の勘定〕 暖みのある、同情のある、涙のある、善意の態度で人を見ずに、冷笑と嘲りと悪意とで人の暗黒面のみを眼を濺ぐ、陰險な人間を罵倒したものの。

のを、ぐるぐる尋ね廻つた時、たしか圓覺寺の塔中であつたらう。矢張りこんな風に石段をのそり／＼と登つて行くと、門内から、黄の衣を着た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭い聲で何處へ御出なさると問うた。余は只境内を拜見にと答へて、同時に足を停めたら、坊主は直ちに、何もありませんぞと言ひ捨て、すた／＼下りて行つた。あまり洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて、坊主を見送ると、坊主は、かの鉢の開いた頭を、振り立て／＼、遂に姿を杉の木の間に隠した。其間かつて一度も振り返つた事はない。成程禪僧は面白い。きび／＼して居るなど、のつそり山門を這入つて、見ると、廣い庫裏も本堂もがらんとして、人影は丸でない。余は其時に心からうれしく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんな洒落に、人を取り扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴

々した。禪を心得て居たからと云ふ譯ではない。禪のせの字も未だに知らぬ。只あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。世の中はしつこい、毒々しい、こせ／＼した其上づう／＼しい、いやな奴で埋つてゐる、元來、何しに世の中へ面を曝して居るんだか、解しかねる奴さへゐる。しかもそんな面に限つて、大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのを以て、左も名譽の如く心得てゐる。五年も十年も人の臀に探偵をつけて、人のひる屁の勘定をして、それが人世だと思つてる。そして人の前へ出て來て、御前は屁を、いくつひつた、いくつひつたと、頼みもせぬ事を教へる。前へ出て云ふなら、それを参考にして、やらんでもないが、後の方から、御前は屁を、いくつひつた、いくつひつたと云ふ。うるさいと云へば猶々云ふ。よせと云へば益云ふ。分つたと云つても、屁をいくつひつた、ひつたと云ふ。さうして、夫が處世の方針だと云ふ。方針



は人々勝手である。只ひつた〜と云はずに、黙つて方針を立てるがよい。人の邪魔になる方針は差し控へるのが禮儀だ。邪魔にならなければ方針が立たぬと云ふなら、こつちも屁のひるのを以て、こつちの方針とする計りだ。さうなつたら日本も運の盡きだらう。

かうやつて、美しい春の夜に、何等の方針も立てずに、あるいてるのは實際高尚だ。興來れば興來るを以て方針とする。興去れば、興去るを以て、方針とする。句を得れば、得た所に方針が立つ。得なければ、得ない所に方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。是が眞正の方針である。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、かうやつて觀海寺の石段を登るのは、隨緣放曠の方針である。

仰數春星一二三の句を得て、石磴を登りつくしたる時、臙にひかる春の海が帯の如くに見えた。山門に入る。絶句は纏める氣にならなくなつた。即坐に已めにする方針を立てる。

〔隨緣放曠〕 外界の事物が來て感觸を與へるを緣、緣に隨うて自體の動作するを隨緣といふ。放曠は恣で心の廣いこと。

〔贅〕 石疊。平たい石を敷き並べたもの。爰は「たゝむ」と訓む。

〔岩佐又兵衛〕 浮世繪の祖、岩佐勝以、浮世繪又兵衛ともいふ。攝津守荒木村重の遺子、長ずるに及び土佐風の畫を學び、好んで當時の風俗畫を畫く。三代將軍家光に召され、千代姫降嫁の装具を畫いた。

〔鬼の念佛〕 大津繪の一。その創祖は詳かでない、或は、大津又平の書き始めたものだといふ。岩佐又兵衛とあるは、名の類似から混同したものである。

〔奉加帳〕 神佛に寄進する財物を出した人名及財額を記す帳簿。

石を贅んで庫裏に通する一筋道の右側は、岡つゝじの生垣で、垣の向ふは、墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い所で、幽かに光る。數萬の薨に、數萬の月が落ちた様だと見上げる。何所やらで鳩の聲がしきりにする。棟の下にでも居るらしい。氣の所爲か、廂のあたりに白いものが、點々見える。糞かも知れぬ。

雨垂れ落ちの所に、妙な影が一行に并んでゐる。木とも見えぬ、草では無論ない。感じから云ふと、岩佐又兵衛のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて、踊りを踊つてゐる姿である。本堂の端から端迄、一行に行儀よく并んで踊つて居る。其影が又本堂の端から端迄一行に行儀よく并んで躍つて居る。臙夜にそゝのかされて、鉦も撞木も、奉加帳も打ちすてゝ、誘ひ合せるや否や、此山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな霸王樹である。高さは七八尺もあらう、絲瓜程な青い黄瓜を、杓子の様に壓しひしやげて、柄の方を下に、



上へ上へと繼ぎ合せる様に見える。あの杓子がいくつ繼がつたら、御仕舞ひになるのか分らない。今夜のうちにも廂を突き破つて、屋根瓦の上迄出さうだ。あの杓子が出来る時には、何でも不意に、どこからか出て来て、びしやりと飛び付くに違ひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が、長い年月のうちに、段々大きくなる様には思はれない。杓子と杓子の連続が、如何にも突飛である。こんな滑稽な樹は、たんとあるまい。しかも澄したものだ。如何なる是佛と問はれて、庭前の柏樹子と答へた僧があるよしだが、同様の間に接した場合には、余は一も二もなく、月下の霸王樹と應へるであらう。

少時、晁補之と云ふ人の紀行文を讀んで、未だに諳誦して居る句がある。時に九月天高く露清く、山空しく月明かに、仰いで星斗を視れば皆光大、たま／＼人の上にあるが如し。窓間の竹數十竿、相摩

〔如何なる是佛〕 虚堂和尚語録「僧曰如何是祖師西來意、州云庭前柏樹子」。「州」とあるは趙州のこと〔晁補之〕 字は無咎、宋の鉅野の人、才氣飄逸、文章温潤奇卓。著書に雜助集七十卷がある。〔紀行文〕 「新城遊北山記」〔古文辭類纂所載〕 をさす。

〔摩戛〕 すれ合うて音を發すること。〔切々〕 細かにして急なる貌。〔梅棕〕 梅樹と椶櫚。〔森然〕 こんもりと茂つてゐるさま。〔鬼魅の離立笑髻〕 鬼魅は妖怪。笑髻は原本には笑髻とある。髻は髪びんの俗字。〔遅明〕 夜の將に明けんとする頃。

戛して聲切々巳ます。竹間の梅棕森然として鬼魅の離立笑髻の状の如し。二三子相顧み、魄動いて寐るを得ず。遅明皆去る」と、又口の内で繰り返して見て、思はず笑つた。此の霸王樹も時と場合によれば、余の魄を動かして、見るや否や山を追ひ下げたであらう。刺とげに手を觸れて見ると、いら／＼と指をさす。

石磴だみを行き盡して左へ折れると、庫裡へ出る。庫裡の前に大きな木蓮がある。殆んど一抱もあらう。高さは庫裡の屋根を抜いて居る。見上げると頭の上は枝である。枝の上も、亦枝である。さうして枝の重なり合つた上が月である。普通、枝があゝ重なると、下から空は見えぬ。花があれば猶見えぬ。木蓮の枝はいくら重なつても、枝と枝との間はほがらかに隙すいてゐる。木蓮は樹下に立つ人の眼を亂す程の細い枝を徒らに張らぬ。花さへ明かである。此遙かなる下から見上げて、一輪の花ははつきりと一輪に見える。其一輪がどこ



〔自らを卑下して居る〕純  
白の花は清秀である、自  
らが高く標置してゐる趣  
がある。白に淡黄を交え  
て、清介の感を和らげて  
ゐるのをいふ。

迄簇がつて、どこ迄咲いて居るか分らぬ。それにも關らず、一輪は遂  
に一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が判然と望まれる。花の  
色は無論純白ではない。徒らに白いのは、寒過ぎる。専らに白いの  
は、ことさらに、人の眼を奪ふ巧みが見える。木蓮の色は夫ではな  
い。極度の白きをわざと避けて、あたゝかみのある淡黄に、奥床し  
くも自らを卑下して居る。余は石盤の上に立つて、此おとなしい花  
が累々とどこ迄も空裏に蔓る様を見上げて、しばらく茫然として居  
た。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。

木蓮の花許りなる空を瞻る。

と云ふ句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合うて居る。

庫裏に入る。庫裡は明け放してある。盗人は居らぬ國と見える。

狗は固より吠えぬ。

〔御免〕

と訪問れる。森として返事がない。

〔頼む〕

と案内を乞ふ。鳩の聲が、くうくと聞える。

〔頼みまあゝす〕と大きな聲を出す。

「おゝゝ」と遙かの向ふで答へるものがある。人の家を訪うて、  
こんな返事を聞かされた事は、決してない。やがて足音が廊下へ響  
くと、紙燭の影が、衝立の向側にさした。小坊主が、ひよこりとあ  
らはれる。了念であつた。

〔和尚さんは御出かい〕

〔居られる。何しに御坐つた〕

〔温泉に居る畫工が來たと、取次で御呉れ〕

〔畫工さんか。それぢや御上り〕

〔斷らないでもないのかい〕

〔衝立〕 ついたて。室内の  
隔てに立っておく具。



「よろしかろ」

余は下駄を脱いで上る。

「行儀がわるい畫工さんぢやな」

「なせ」

「下駄を、よう御揃へなさい。そらこゝを御覽」と紙燭を差しつける。黒い柱の真中に、土間かち五尺許りの高さを見計らつて、半紙を四つ切りにした上へ、何か認めてある。

「そおら。讀めたる。脚下を見よ、と書いてあるが」

「成程」と余は自分の下駄を丁寧揃へる。

和尚の室は廊下を鍵の手に曲つて、本堂の横手にある。障子を恭しくあけて、恭々しく敷居越しにつくばつた了念が、

「あのう、志保田から、畫工さんが來られました」と云ふ。甚だ恐縮の體である。余は一寸可笑しくなつた。

〔恐縮の體〕 おそれいつた様子。了念の畫工に對する洒落なきびくしたぞんざいな應對、師匠に向つての恐縮の體、この兩極のとり合せに一種の軽い滑稽味を浮出してゐる。

「左様が、是へ」

余は了念と入れ代る。室は頗る狭い。中に團爐裏を切つて、鐵瓶が鳴る。和尚は向側に書見をして居た。

「さあ是へ」と眼鏡をはづして、書物を傍へおしやる。

「了念。りようゝねゝん」

「はあゝゝい」

「坐蒲團を上げんか」

「はあゝゝい」了念は遠くで、長い返事をする。

「よう、來られた。嘸退屈だろ」

「あまり月がいくから、ぶらくゝ來ました」

「いゝ月ぢやな」と障子をあける。飛び石が二つ、松一本の外には何も無い、平庭ひらにはの向ふは、すぐ懸崖と見えて、眼の下に朧夜の海が忽ち開ける。急に氣が大きくなつた様な心持である。漁火いさびがこゝ、



かしこに、ちらついで、遙かの末は空に入つて、星に化ける積りだらう。

「是はいゝ景色。和尚さん、障子をしめて居るのは勿體ないぢやありませんか」

「左様よ。しかし毎晩見て居るからな」

「何晩見てもいゝですよ、此景色は、私なら寝ずに見て居ります」

「ハ、ハ、ハ。尤もあなたは畫工だから、わしとは少し違ふて」

「和尚さんだつて、うつくしいと思つてゐるうちは畫工でさあ」

「なる程それもさうぢやろ。わしも達磨の畫位は是で、かくがの。

そら、こゝに掛けてある、此軸は先代がかゝれたのぢやが、中々よ  
うかいとる」

成程達磨の畫が小さい床に掛つてゐる。然し畫としては、頗るま  
づいものだ。只俗氣がない。拙を蔽はうと力めて居る所が一つもな

い。無邪氣な畫だ。此先代もやはり此畫の様な構はない人であつた  
んだらう。

「無邪氣な畫ですね」

「わし等のかく畫はそれで澤山ぢや。氣象さへあらはれて居れば……」

「上手で俗氣があるのより、いゝです」

「はゝゝゝまあ、さうでも、賞めて置いてもらはう。時に近頃は畫工  
にも博士があるかの」

「畫工の博士はありませんよ」

「あ、左様か。此間、何でも博士に一人逢た」

「へえゝ」

「博士と云ふとえらいものぢやろな」

「えゝ。えらいでせう」



〔蜀犬日に吠え〕 蜀犬は日を見る事が少いので日を見る時は吠える。見識の狭い者は他人の卓絶した言行に對して疑ひてかまびすしく言ひ立てるのに喩へる。韓愈、蜀中山高霧重、見レ日時少、毎レ至二日出、則群犬疑而吠レ之也〔吳牛月に喘ぐ〕 人の畏懼の甚しいのを笑ふのである。世説「滿奮畏レ風、在ニ晋武帝座、北窓作ニ琉璃屏、實密似レ疎、奮有ニ難色、帝笑問レ之、奮答曰、臣猶ニ吳牛見レ月而喘ニ」吳牛は水牛のこと。吳は南國で熱い。水牛は熱を畏れる、その局、月を見ても日かと疑うて、月を見ても喘ぐといふ。

「畫工には博士がありさうなものぢやがな。なせ無いだらう」  
 「さういへば、和尚さんの方にも博士がなけりやならないでせう」  
 「ハ、まあそんなものかな。——何とか云ふ人ぢやつたて、此間逢うた人は——どこぞに名刺がある筈だが……」

「どこで御逢ひです、東京ですか」

「いやこゝで、東京へは、も二十年も出ん。近頃は電車とか云ふものが出来たさうぢやが、一寸乗つて見たい様な氣がする」

「つまらんものですよ。やかましくつて」

「さうかな。蜀犬日に吠え、吳牛月に喘ぐと云ふから、わしの様な田舎者は、却つて困るかも知れんてのう」

「困りやしませんがね。つまらんですよ」

「左様かな」

鐵瓶の口から烟が盛に出る。和尚は茶箆筒から茶器を取り出して、

茶を注いでくれる。

「番茶を一つ御上り。志保田の隱居さんの様に甘い茶ぢやない」

「いえ結構です」

「あなたは、さうやつて、方々あるく様に見受けるが矢張り畫をかく爲めかの」

「え、。道具丈は持つてあるきますが、畫はかゝないでも構はないです」

「はあ、それぢや遊び半分かの」

「さうですね。さう云つても善いでせう。屁の勘定をされるのがいやですからね」

流石の禪僧も、此語丈は解しかねたと見える。

「屁の勘定は何かな」

「東京に永く居ると屁の勘定をされますよ」



〔譬の穴が云々〕 他人に對して獨よがりの批評をして得意になつてゐる近代人を諷刺してゐる。

〔探偵の方です〕 「人のあら探し」を畫工は探偵といつた。和尙は「屁の勘定」を衛生に解し、探偵を警察の探偵にとつて、頓珍漢な會話が始まる。二人とも自得の境を把持して洒々然としてゐる。

「どうして」

「ハ、勘定丈ならいゝですが。人の屁を分拆して譬の穴が三角だの、四角だのつて餘計な事をやりますよ」

「はあ、矢張衛生の方かな」

「衛生ぢやありません。探偵の方です」

「探偵？ 成程、それぢや警察ぢやの。一體警察の、巡査のて、何の役に立つかの。なけりやならんかいの」

「さうですね、畫工には入りませんね」

「わしにも入らんがな。わしはまだ巡査の厄介になつた事がない」

「さうでせう」

「しかし、いくら警察が屁の勘定をしたてゝ、構はんがな。澄まして居たら。自分にわるい事がなけりや、なんぼ警察ぢやて、どうもなるまいがな」

「屁位で、どうかされちや堪りません」

〔日本橋の眞中云々〕 衆人環視の裏に自分の腹を斷ち割つて見せても一點のやましきもない事を言ふのであらう。臟腑は五臟六腑で、はらたのたと、轉じて心の意。

「わしが、小坊主のとき、先代がよう云はれた。人間は日本橋の眞中に臟腑をさらけ出して、恥づかしくない様になければ修行を積んだとは云はれんてな。あなたもそれ迄修行をしたらよかる。旅杯

はせんでも濟む様になる」

「畫工になり澄ませば、いつでもさうなれます」

「それぢや畫工になり澄ましたらよかる」

「屁の勘定をされちや、なり切れませんよ」

「ハ、。それ御覽。あの、あなたの泊つて居る、志保田のお那美さんは、嫁に入つて歸つてきてから。どうも色々な事が氣になつてならん、ならんと云うて仕舞にとう／＼わしの所へ法を問ひに來たぢやて。所が近頃は大分出來てきて、そら、御覽。あの様な譯のわかつた女になつたぢやて」



〔機鋒〕心氣の向ふきつきき、禪家で、禪を談ずる言辭の鋒銛銳利なのをいふ。  
 〔大事を窮明云々〕人生窮屈の道理を明らかに悟り、の境に入らねばならぬ因縁といふ程の意であらう。

「へえ、どうも只の女ぢやないと思ひました」  
 「いや中々機鋒の鋭い女で——わしの所へ修行に来て居た泰安と云ふ若僧も、あの女の爲めに、ふとした事から大事を窮明せんならん因縁に逢着して——今によい知識になるやうぢや」  
 静かな庭に、松の影が落ちる。遠くの海は、空の光りに應ふるが如く、應へざるが如く、有耶無耶の微かなる、耀きを放つ。漁火は明滅す。

「あの松の影を御覽」

「奇麗ですな」

「只奇麗かな」

「え、」

「奇麗な上に、風が吹いても苦にしない」

茶碗に餘つた澁茶を飲み干して、絲底を上、茶托へ伏せて、立

ち上る。

「門迄送つてあげよう。りよう、ねえ、ん。御客が御歸りだぞよ」

送られて、庫裡を出ると、鳩がくう、くうと鳴く。

「鳩程可愛いものはない、わしが、手をたくと、みな飛んでくる呼んで見よか」

月は愈明るい。しん／＼として、木蓮は幾朶の雲華を空裏に撃<sup>か</sup>げて居る。沉寥たる春夜の真中に、和尚ははたと掌を拍つ。聲は風中に死して一羽の鳩も下りぬ。

「下りんかいな。下りさうなものぢやが」

了念は余の顔を見て、一寸笑つた。和尚は鳩の眼が夜でも見えると思つて居るらしい。氣樂なものだ。

山門の所で、余は二人に別れる。見返ると、大きな丸い影と、小さな丸い影が、石盤の上落ちて、前後して庫裡の方に消えて行

〔幾朶〕幾枝。多くの枝。  
 〔雲華〕簇がり咲いてゐる華。  
 〔沉寥〕ひっそりとして淋しい。  
 〔聲は風中に死し〕手を拍つた聲は徒らに大氣の中に消えて、反應のないさま。



【オスカー・ワイルド】  
Oscar Wilde, (1856—1900)  
愛蘭の文學者。

【塵滓】 ちりとかす。  
【貼し】 テフし。はりつける。

【行屎走尿の際】 廁に用を  
足す間。  
【畫架】 畫をかく時、描く  
べき布などを立て掛けて  
おく臺。  
【小手板】 繪具を分けて盛  
る小さい板。

【尺素】 尺牘に同じで手紙  
のことであるが、爰は、  
僅かの帛。  
【寸縑】 僅かの繪絹。  
【ミケル・アンゼロ】 Michel  
Angelo, (1475—1564)  
文藝復興期に於ける伊太  
利の美術家。  
【ラファエラ】 Raphael  
Sanzio, (1483—1520) 文  
藝復興期の畫家。  
【歩武を齊うし】 あゆみを  
ひとしくする。同列にあ  
るをいふ。  
【遜る】 ゆづる。ひけをと  
る。  
【酔興】 酔狂。ものずき。

く。

十二

基督は最高度に藝術家の態度を具足したるものなりとは、オスカ  
ー、ワイルドの説と記憶してゐる。基督は知らず。觀海寺の和尚の  
如きは、正しく此資格を有して居ると思ふ。趣味があると云ふ意味  
ではない。時勢に通じてゐると云ふ譯でもない。彼は畫と云ふ名の  
殆んど下すべからざる達磨の幅を掛けて、よう出來た杯と得意であ  
る。彼は畫工に博士があるものと心得て居る。彼は鳩の眼を夜でも  
利くものと思つて居る。それにも關はらず、藝術家の資格があると  
云ふ。彼の心は底のない囊の様に行き抜けである。何にも停滯して  
居らん。隨處に動き去り、任意に作し去つて、些の塵滓の腹部に沈  
澱する景色がない。もし彼の腦裏に一點の趣味を貼し得たならば、

彼は之く所に同化して、行屎走尿の際にも、完全なる藝術家として  
存在し得るだらう、余の如きは探偵に屁の數を勘定される間は、到  
底畫家にはなれない。畫架に向ふ事は出来る。小手板を握る事は出  
来る。然し畫工にはなれない。かうやつて、名も知らぬ山里に來て、  
暮れんとする春色のなかに五尺の瘦驅を埋めつくして、始めて、眞  
の藝術家たるべき態度に吾身を置き得るのである。一度び此境界に  
入れば美の天下はわが有に歸する。尺素を染めず、寸縑を塗らざる  
も、われは第一流の大畫工である、技に於て、ミケルアンゼロに及  
ばず、巧みなる事ラフハエルに譲る事ありとも、藝術家たるの人格  
に於て、古今の大家と歩武を齊うして、毫も遜る所を見出し得ない、  
余は此温泉場へ來てから、未だ一枚の畫もかゝない。繪の具箱は酔  
興に擔いできたかの感さへある。人はあれでも畫家かと嗤ふかもし  
れぬ。いくら嗤はれても、今の余は眞の畫家である。立派な畫家で



ある。かう云ふ境を得たものが、名畫をかくとは限らん。然し名畫をかき得る人は必ず此境を知らねばならん。

朝飯をすまして、一本の敷島をゆたかに吹かしたるとき余の觀想は以上の如くである。日は霞を離れて高く上つて居る。障子をあけて、後ろの山を眺めたら、蒼い樹が非常にすき通つて、例になく鮮やかに見えた。

余は常に空氣と、物象と、彩色の關係を宇宙で尤も興味ある研究の一と考へて居る。色を主にして空氣を出すか、物を主にして、空氣をかくか。又は空氣を主にして其うちに色と物とを織り出すか。畫は少しの氣合一つで色々な調子が出る。此調子は畫家自身の嗜好で異なつてくる。それは無論であるが、時と場所とで、自づから制限されるのも亦當然である。英國人のかいた山水に明るいものは一つもない。明るい畫が嫌なのかも知れぬが、よし好きであつても、あの空

〔氣合〕 こゝろもち。氣分。

〔ターダール〕 Goodall, Frederick. (1822-1904) 英國の畫家。

氣では、どうすることも出来ない。同じ英人でもターダール杯は色の調子が丸で違ふ。違ふ筈である。彼は英人でありながら、かつて英國の景色をかいた事がない。彼の畫題は彼の郷土にはない。彼の本國に比すると、空氣の透明の度の非常に勝つて居る、埃及又は波斯邊の光景のみを擇んである。従つて彼のかいた畫を、始めて見ると誰も驚ろく。英人にもこんな明かな色を出すものがあるかと疑ふ位判然出來上つて居る。

個人の嗜好はどうする事も出來ん。然し日本の山水を描くのが主意であるならば、吾々も亦日本固有の空氣と色を出さなければならん。いくら佛蘭西の繪がうまいと云つて、其色を其儘に寫して、此が日本の景色だとは云はれない。矢張り面のあたり自然に接して、朝な夕なに雲容烟態を研究した揚句、あの色こそと思つたとき、すぐ三脚几を擔いで飛び出さなければならぬ。色は刹那に移る。一た

〔雲容烟態〕 雲のかたち煙のすがた。自然の有様。



〔歌舞伎座〕 歌舞伎を演ずる劇場の名。歌舞伎劇でよく切腹の場面を演ずる所から、女の九寸五分を胸に擬した場面をそれに比して言うたもの。

〔師走〕 十二月。奥儀抄「此月は僧を迎へて經を讀ませ東西に馳せ走るが故に師走月の意なり」とある所から「師走」とかくのである。

〔美的生活〕 高山樗牛は在來日本の性慾に對する偽善的解釋を打破して、性慾の解放によつて得る自我満足の本能主義を唱へ、この本能に徹した生活を美的生活であると稱した。

び機を失すれば、同じ色は容易に眼には落ちぬ。余が今見上げた山の端には、滅多にこの道で見る事の出来ない程な好い色が充ちてゐる。折角来て、あれを逃すのは惜しいものだ。一寸寫してきよう。襖をあけて、縁側へ出ると、向ふ二階の障子に身を倚たして、那美さんが立つて居る。顚を襟のなかへ埋めて、横顔丈しか見えぬ。余が挨拶を仕様と思ふ途端に、女は左手を落した儘、右の手を風のように動かした。閃くは稻妻か二折三折れ胸のあたりを、するりと走るや否や。かちりと音がして、閃めきはすぐ消えた。女の左り手には九寸五分の白鞘がある。姿は忽ち障子の影に隠れた。余は朝つばらから歌舞伎座を覗いた氣で宿を出る。門を出て、左へ切れると、すぐ岨道つゞきの、爪上りになる。鶯が所々で鳴く。左り手がなだらかな谷へ落ちて、密柑が一面に植ゑてある。右には高からぬ岡が二つ程並んで、此所にもあるは密柑の

みと思はれる。何年前か一度此地に來た。指を折るのも面倒だ。何でも寒い師走の頃であつた。此時密柑山に密柑がべた生りに生る景色を始めて見た。密柑取りに一枝賣つてくれと云つたら、幾顆でも上げましょ。持つて入らつしやいと答へて、樹の上で妙な節の唄をうたひ出した。東京では密柑の皮でさへ藥種屋へ買ひに行かねばならぬのと思つた。夜になると、しきりに銃つづの音がする。何だと聞いたら、獵師が鳴をとるんだと教へてくれた。此時是那美さんの、あの字も知らずに濟んだ。

あの女を役者にしたら、立派な女形が出来る。普通の役者は、舞臺へ出ると、よそ行きの藝をする。あの女は家のなかで、常住芝居をして居る。しかも芝居をして居るとは氣がつかん。自然天然に芝居をして居る。あんなのを美的生活とでも云ふのだらう。あの女の御蔭で女の修行が大分出來た。



あの女の所作を芝居と見なければ、薄氣味がわるくて一日も居た  
 たまれん。義理とか人情とか云ふ尋常の道具立を背景にして、普通  
 の小説家のやうな觀察點からあの女を研究したら、刺戟が強過ぎて  
 すぐいやになる。現實世界に在つて、余とあの女の間には纏綿した二  
 種の關係が成り立つとするならば、余の苦痛は恐らく言語に絶する  
 だらう。余の此度の旅行は俗情を離れて、あく迄畫工になり切るの  
 が主意であるから、眼に入るものは悉く畫として見なければならん。  
 能、芝居、若くは詩中の人物としてのみ觀察しなければならん。此  
 覺悟の眼鏡から、あの女を覗いて見ると、あの女は、今迄見た女の  
 うちで尤もうつくしい所作をする。自分でうつくしい藝をして見せ  
 ると云ふ氣がない丈に、役者の所作よりも猶うつくしい。

こんな考をもつ余を、誤解してはならん。社會の公民として不適  
 當だ杯と評しては尤も不届きである。善は行ひ難い、徳は施こしに

〔二種の關係〕 義理と人情  
 との關係。

〔勇猛精進〕 精進とは、上  
 生經疏「精謂精純無二惡  
 雜一故、進謂昇進不<sub>レ</sub>懈  
 怠一故」とあつて、佛道  
 を勤修して懈怠のない意  
 〔鼎鑊〕 漢書刑法志の註  
 「鼎の大にして足なきを  
 鑊といふ。以て人を煮る  
 也」鼎鑊は古昔魚肉を煮  
 るに用ゐ、後世は刑具と  
 した。文天祥、正氣歌「鼎  
 鑊甘如飴」  
 〔白日を射返す〕 輝く太陽  
 よりも一層輝かしいのを  
 いふ。

くい、節操は守り安からぬ。義の爲めに命を捨てるのは惜しい。是  
 等を敢てするのは何人に取つても苦痛である。その苦痛を冒す爲め  
 には、苦痛に打ち勝つ丈の愉快がどこかに潜んで居らねばならん。  
 畫と云ふも、詩と云ふも、あるは芝居と云ふも、此悲酸のうちに籠  
 る快感の別號に過ぎん。此趣きを解し得て、始めて吾人の所作は壯  
 烈にもなる。閑雅にもなる、凡ての困苦に折ち勝つて、胸中一點の  
 無上趣味を満足せしめたくなる。肉體の苦しみを度外に置いて、物  
 質上の不便を物とも思はず、勇猛精進の心を驅つて、人道の爲めに、  
 鼎鑊に烹らるゝを面白く思ふ。若し人情なる狭き立脚地に立つて、  
 藝術の定義を下し得るとすれば、藝術は、われ等教育ある士人の胸  
 裏に潜んで、邪を避け正に就き、曲を斥け直にくみし、弱を扶け強  
 を挫かねば、どうしても堪へられぬと云ふ一念の結晶して、燦とし  
 て白日を射返すものである。



〔芝居氣〕 芝居の狂言めかさうとする心。事をたくんで興がる氣質。  
〔個中〕 この範圍内。這裏。

〔巖頭の吟〕 明治卅六年、華嚴瀧に身を投じた藤村操のこと。その時巖頭の樹に誌した絶筆が巖頭の吟である。「悠々たる哉天壤遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此の大を計らんとす、ホレーシヨの哲學何等のオーソリテイに値するものぞ。萬有の真相は一にして盡く、曰く不可解。われこの惱みを抱いて煩悶遂に死を決す。既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る大なる悲觀は大なる樂觀と一致するを」  
〔體し〕 身に踐み行ふ。

芝居氣があると人の行爲を笑ふ事がある。うつくしき趣味を貫かんが爲めに、不必要なる犠牲を敢てするの人情に遠きを嗤ふのである。自然にうつくしき性格を發揮するの機會を待たずして、無理矢理に自己の趣味觀を銜ふの愚を笑ふのである。眞に個中の消息を解し得たるもの、嗤ふは其意を得て居る。趣味の何物たるをも心得ぬ下司下郎の、わが卑しき心根に比較して他を賤しむに至つては許し難い。昔し巖頭の吟を遺して、五十丈の飛瀑を直下して急湍に赴いた青年がある。余の視る所にては、彼の青年は美の一字の爲めに、捨つべからざる命を捨てたるものと思ふ。死其物は洵に壯烈である。只其死を促すの動機に至つては解し難い。去れども死其物の壯烈をだに體し得ざるものが、如何にして藤村子の所作を嗤ひ得べき、彼等は壯烈の最後を遂ぐるの情趣を味ひ得ざるが故に。たとひ正當の事情のもとにも、到底壯烈の最後を遂げ得べからざる制限ある點に

於て、藤村子よりは人格として劣等であるから、嗤ふ權利がないものと余は主張する。

余は畫工である。畫工であればこそ趣味専門の男として、たとひ人情世界に墮在するも、東西兩隣りの没風流漢よりも高尚である。社會の一員として優に他を教育すべき地位に立つて居る。詩なきもの、畫なきもの、藝術のたしみなきものよりは、美しくしき所作が出来る。人情世界にあつて、美しく所作は正である、義である、直である。正と義と直を行爲の上に於て示すものは天下の公民の模範である。しばらく人情界を離れたる余は、少なくとも此旅中に人情界に歸る必要はない。あつては折角の旅が無駄になる。人情世界から、ぢやり／＼する砂をふるつて、底にあまる、うつくしい金のみを眺めて暮さなければならぬ。余自らも社會の一員を以て任じては居らぬ。純粹なる専門畫家として、己れさへ纏綿たる利害の累索を絶つて、

〔累索〕 しばるなは。束縛。



優に晝布裏に往來して居る。況んや山をや水をや他人をや。那美さんの行爲動作と雖ども只其儘の姿と見る外に致し方がない。

三丁程上ると、向ふに白壁の一構が見える。密柑のなかの住居だなどと思ふ。道は間もなく二筋に切れる。白壁を横に見て左りへ折れる時、振り返つたら、下から赤い腰巻をした娘が上つてくる。腰巻が次第に盡きて、下から茶色の脛が出る。脛が出切つたら、藁草履が段々動いて来る。頭の上に山櫻が落ちかゝる。背中には光る海を負つてゐる。

岨道を登り切ると、山の出鼻の平な所へ出た。北側は翠りを疊む春の峯で、今朝縁から仰いだあたりかも知れない。南側には焼野とも云ふべき地勢が幅半丁程廣がつて、末は崩れた崖となる。崖の下は今過ぎた密柑山で、村を跨いで向ふを見れば、眼に入るものは言はずも知れた青海である。

〔腰巻が次第につきて云々〕  
漸層法の詞姿で、女のわが視界に浮上つて来るさまを巧みに描いてゐる。  
〔頭の上に山櫻云々〕 山櫻と光る海とで、女が纏つた晝中のものになる。

路は幾筋もあるが、合ふては別れ、別れては合ふから、どれが本筋とも認められぬ。どれも路である代りに、どれも路でない。草のなかに、黒赤い地が、見えたり隠れたりして、どの筋につながるか見分のつかぬ所に變化があつて面白い。

どこへ腰を据ゑたものかと草のなかを遠近と徘徊する。縁から見るときは晝になると思つた景色も、いざとなると存外纏まらない。色も次第に變つてくる。草原をのそつくうちに、何時しか描く氣がなくなつた。描かぬとすれば、地位は構はん、どこへでも坐つた所がわが住居である。染み込んだ春の日が、深く草の根に籠つて、どつかと尻を卸すと、眼に入らぬ陽炎を踏み潰した様な心持ちがする。海は足の下に光る。遮ざる雲の一片さへ持たぬ春の日影は、普ねく水の上を照らして、何時の間にかほとぼりは波の底迄浸み渡つたと思はるゝ程暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平に流したる所々



〔しろかねの細鱗〕 春の日に海の光るさま。

〔高麗船〕 往昔吾國に貢物を持つて來た三韓の船。  
〔大千世界〕 廣い世界の意。

〔阿彌陀〕 阿彌陀被り。帽子、笠などを後頭部の方へ餘計に傾けて被ること。

に、しろかねの細鱗を疊んで濃やかに動いて居る。春の日は限り無き天が下を照らして、天が下は限りなき水を湛へたる間には、白き帆が小指の爪程に見えるのみである。然も其帆は全く動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから渡つてくる時には、あんなに見えたであらう。其外は大千世界を極めて、照らす日の世、照らさるゝ海の世のみである。

ころりと寐る。帽子が額をすべつて、やけに阿彌陀となる。所々の草を一二尺抜いて、木瓜の小株が茂つてゐる。余が顔は丁度其一つの前に落ちた。木瓜は面白い花である。枝は頑固であつて曲つた事がない。そんなら眞直かと、云ふと、決して眞直でもない。只眞直な短かい枝に、眞直な短かい枝がある角度で衝突して、斜に構へつゝ全體が出来上つて居る。そこへ、紅だか白だか要領を得ぬ花が安閑と咲く。柔かい葉さへちら／＼着ける。評して見ると木瓜は花

〔拙を守る〕 拙く愚かなるを守つて分に安じること。  
陶淵明の句「守レ拙歸三田園」

のうちで、愚かにして悟つたものであらう。世間には拙を守ると云ふ人がある。此人が來世に生れ變ると屹度木瓜になる。余も木瓜になりたい。

子供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切つて、面白く技振を作つて、筆架をこしらへた事がある、それへ二錢五厘の水筆を立てかけて、白い穂が花と葉の間から、隠見するのを机へ載せて樂んだ。其日は木瓜の筆架ばかり氣にして寝た。あくる日眼が覺めるや否や、飛び起きて机の前へ行つて見ると、花は萎れ葉は枯れて、白い穂丈が元の如く光つて居る。あんなに奇麗なものがどうして、かう一晚のうちに、枯れるだらうと、その時は不審の念に堪へなかつた。今思ふと其時分の方が餘程出世間的である。

寢るや否や眼についた木瓜は二十年來の舊知己である。見詰めて居ると次第に氣が遠くなつて、いゝ心持ちになる。又詩興が浮ぶ。

〔出世間的〕 煩惱を増長せしめる世間を解脱すること。爰は脱俗的の意。  
〔詩興〕 詩的感興。



〔出門多所思云々〕 漱石氏の明治卅一年三月の作。「春興」と題したもの。「廢道入霞微」は、人の通らぬすたれた道が霞の微かに單めて入る中に消えてゆくこと。「晴暉」は、ほがらかな日の光。「黃鳥」は、鶯。「宛轉」は、ゆるやかに自由に動く貌。「落英紛霏」は、落花の亂れ飛ぶこと。「平蕪」は、荒れた大きい野。「孤愁」は、たよりない愁。「斷鴻」は、仲間からはづれたひとりぼつちの雁。鴻は大なる雁。「窈窕」は、しとやかな貌、なまめいた貌、爰は奥深い貌。「縹緲」は、かすかにしてとりとめ難いさま。はるかにひろい貌。「韶光」は、春の美しい景色。「依々」は、木の茂るさま、思ひ慕ふさま。「芬菲」は、花草のよい香。

寝ながら考へる。一句を得る毎に寫生帖に記して行く。しばらくして出來上がった様だ。始めから讀み直して見る。

出門多所思。春風吹吾衣。芳草生車轍。廢道入霞微。停筇而矚目。萬象帶晴暉。聽黃鳥宛轉。觀落英紛霏。行盡平蕪遠。題詩古寺扉。孤愁高雲際。大空斷鴻歸。寸心何窈窕。縹緲忘是非。三十我欲老。韶光猶依々。逍遙隨物化。悠然對芬菲。

あゝ出來た、出來た。是で出來た。寝ながら木瓜を觀て、世の中を忘れて居る感じがよく出た。木瓜が出なくつても、海が出なくつても、感じさへ出れば夫で結構である、と唸りながら、喜んでゐると、エヘンと云ふ人間の咳拂が聞えた。こいつは驚いた。

寢返りをして、聲の響いた方を見ると、山の出鼻を回つて、雜木の間から、一人の男があらはれた。

茶の中折れを被つてゐる。中折の形は崩れて、傾く縁の下から眼が見える。眼の恰好はわからんが、慥かにきよろ／＼ときよろつく様だ。藍の縞物の尻を端折つて、素足に下駄がけの出で立ちは、何だか鑑定がつかない。野生の髯丈で判断すると正に野武士の價値はある。

男は岨道を下りるかと思ひの外、曲り角から又引返した。もと來た路へ姿をかくすかと思ふと、さうでもない。又あるき直してくる。此草原を、散歩する人の外に、こんな行きつ戻りつするものはない筈だ。然しあれが散歩の姿であらうか。又あんな男が此近邊に住んで居るとも考へられない。男は時々立ち留る。首を傾ける又は四方を見廻す。大に考へ込む様にもある。人を待ち合はせる風にも取られる。何だかわからない。

余は此物騒な男から、つひに吾眼をはなす事が出來なかつた。別に恐しいでもない、又晝にしようと云ふ氣も出ない。只眼をはなす

〔野生の髯〕 手入れをしな<sup>く</sup>髯。  
〔野武士〕 烏合の武士。

〔物騒〕 ものさわがしい。  
穩かでないこと。



事が出来なかつた。右から左、左から右と、男に添うて、眼を働かせてゐるうちに、男ははたと留つた。留まると共に、又ひとりの人物が、余が視界に點出された。

二人は雙方で互に認識した様に、次第に雙方から近付いて来る。余が視界は漸々縮まつて、原の真中で一點の挟き間に疊まれて仕舞ふ。二人は春の山を脊に、春の海を前に、びたりと向き合うた。

男は無論例の野武士である。相手は？ 相手は女である。那美さんである。

余是那美さんの姿を見た時、すぐ今朝の短刀を連想した。もしや懐に呑んで居りはせぬかと思つたら、さすが非人情の余もたゞひやりとした。

男女は向き合つた儘、しばらくは、同じ態度で立つて居る。動く景色は見えぬ。口は動かして居るかも知れんが、言葉は丸で聞えぬ。

〔體を開いて〕 身體を動かして。  
〔昂然〕 たかぶる貌。

男はやがて首を垂れた。女は山の方を向く。顔は余の眼に入らぬ。山では鶯が啼く。女は鶯に耳を借して、居るとも見える。しばらくすると、男が屹と、垂れた首を舉げて、半ば踵を回らしかける。尋常の様ではない。女は颯と體を開いて、海の方へ向き直る。帯の間から頭を出して居るのは懐劍らしい。男は昂然として、行きかゝる。女は二歩許り、男の踵を縫うて進む。女は草履ばきである。男の留つたのは、呼び留められたのか。振り向く瞬間に女の右手は帯の間へ落ちた。あぶない！

するりと抜け出たのは、九寸五分かと思ひの外、財布の様な包み物である。差し出した白い手の下から、長い紐がぶら／＼と春風に揺れる。

片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した。白い手頸に、紫の色。此丈の姿勢で充分晝にはならう。



〔こなし具合身〕 體のあつ  
かひかげん。  
〔不即不離〕 即くでもなけ  
れば離れるでもない、そ  
の中間。

紫で一寸切れた圖面が、二三寸の間隔をとつて、振り返る男の體のこなし具合で、うまい按排につながれてゐる。不即不離とは此刹那の有様を形容すべき言葉と思ふ。女は前を引く態度で、男は後へ引かれた様子だ。しかもそれが實際に引いてもひかれても居らん。兩者の縁は紫の財布の盡くる所でふつりと切れてゐる。

二人の姿勢が此の如く美妙的な調和を保つて居ると同時に、兩者の顔と、衣服には飽迄、對照が認められるから、畫として見ると一層興味が深い。

脊のすんぐりした、色黒の髻づらと、くつきりと締つた細面に、襟の長い、撫肩の華奢姿。ぶつきら棒に身をひねつた下駄がけの野武士と、不斷着の銘仙さへしなやかに着こなしした上、腰から上を、おとなしく反り身に控へたる瘦形。はげた茶の帽子上、藍縞の尻切り出立ちと、陽炎さへ燃やすべき櫛目の通つた鬢の色に、黒繻子のひ

かる奥から、ちらりと見せた帶上の、なまめかしさ。凡てが好畫題である。

男は手を出して財布を受け取る。引きつ引かれつ巧みに平均を保ちつゝあつた二人の位置は忽ち崩れる。女はもう引かぬ、男は引かれうともせぬ。心的状態が繪を構成する上に、斯程の影響を與へやうとは、畫家ながら、今迄氣がつかかなかつた。

二人は左右に分かれる。雙方に氣合がないから、もう畫としては、支離滅裂である。雜木林の入口で男は一度振り返つた。女は後をも見ぬ。すらくくと、こちらへ歩行てくる。やがて余の眞正面迄來て、

「先生、先生」

と二聲掛けた。是はしたり何時見付かつたらう。

「何です」

と余は木瓜の上へ顔を出す。帽子は草原へ落ちた。

〔氣合がない〕 氣合がかゝ  
つてゐない意。精神の籠  
つた氣勢がない。  
〔支離滅裂〕 ちりぢりばら  
く。



「何をそんな所でして入らつしやる」

「詩を作つて寝てゐました」

「うそを仰しやい。今のを御覽でせう」

「今の？ 今の、あれですか。えゝ。少々拜見しました」

「ホゝ、少々でなくても、澤山御覽なさればいゝのに」

「實の所は澤山拜見しました」

「それ御覽なさい。まあ一寸、こつちへ出て入らつしやい。木瓜の中から出て居らつしやい」

余は唯々として木瓜の中から出て行く。

「まだ木瓜の中に御用があるんですか」

「もう無いんです。歸らうかとも思ふんです」

「それぢや御一所に参りませうか」

「えゝ」

〔唯々〕 はいくゝと丁寧に返事すること、又は他人の意におもねり順ふ貌。

余は再び唯々として、木瓜の中に退いて、帽子を被り、繪の道具を纏めて、那美さんと一所にあるき出す。

「畫を御描きになつたの」

「やめました」

「こゝへ入らしつて、まだ一枚も御描きになさらないぢやありませんか」

「えゝ」

「でも折角畫をかきに入らしつて、些とも御かきなさなくなつちや、詰りませんはね」

「なに詰つてるんです」

「おやさう。なぜ？」

「何故でも、ちやんと詰まるんです。畫なんぞ描いたつて、描かなくつたつて、詰る所は同じ事さあ」



「そりや酒落なの、ホ、、、随分呑氣ですわえ」

「こんな所へくるからには、呑氣にでもしなくつちや、來た甲斐がないぢやありませんか」

「なあに何處に居ても、呑氣にしなくつちや、生きてゐる甲斐はありませんよ。私なんぞは、今の様な所を人に見られても恥かしくも何とも思ひません」

「思はんでもいゝでせう」

「さうですね。あなたは今の男を一體何だと御思ひです」

「さうさな。どうもあまり、金持ちやありませんね」

「ホ、、善く中りました。あなたは、占ひの名人ですよ。あの男は、貧乏して日本に居られないからつて、私に御金を貰ひに來たのです」

「へえ、どこから來たのです」

「城下から來ました」

「随分遠方から來たもんですね。それで何處どこへ行くんですか」

「何でも滿洲へ行くさうですが」

「何しに行くんですか」

「何しに行くんですか。御金を拾ひに行くんだか、死に、行くんだか、分りません」

此時余は眼をあげて、ちよと女の顔を見た。今結んだ口元には、微かなる笑の影が消えかゝりつゝある。意味は解せぬ。

「あれは、わたくしの亭主です」

迅雷耳を掩ふに違あらず、女は突然として一太刀浴びせかけた。余は全く不意撃を喰つた。無論そんな事を聞く氣はなし、女も、よもや、此所迄曝け出さうとは考へて居なかつた。「どうです、驚ろいたでせう」と女が云ふ。

〔迅雷耳を云々〕事の急で禦ぐに違のない意。淮南子「疾雷不レ及レ塞レ耳、疾霆不レ暇レ掩レ目」



「え、少々驚ろいた」

「今の亭主ぢやありません、離縁された亭主です」

「なる程、それで……」

「夫れぎりです」

「さうですか。——あの蜜柑山に立派な白壁の家がありますね。ありや、いゝ地位にあるが、誰の家なんですか」

「あれが兄の家です。歸り路に一寸寄つて行きませう」

「用でもあるんですか」

「え、一寸頼まれものがあります」

「一所に行きませう」

岨道の登り口へ出て、村へ下りずに、すぐ、右に折れて、又一丁程を登ると、門がある。玄關へかゝらずに、すぐ庭口へ廻る。女が無遠慮につか／＼行くから、余も無遠慮につか／＼行く。南向きの

庭に、棕櫚が三四本あつて、土塀の下はすぐ蜜柑島である。

女はすぐ、椽鼻へ腰をかけて、云ふ。

「いゝ景色だ。御覽なさい」

「成程、いゝですな」

障子のうちは、靜かに人の氣合もせぬ。女は音なふ景色もない。只腰をかけて、蜜柑島を見下して平氣である。余は不思議に思つた。元來何の用があるのかしら。

仕舞には話もないから、兩方共無言の儘で蜜柑島を見下して居る。午に逼る太陽は、まともに暖かい光線を、山一面にあびせて、眼に餘る蜜柑の葉は、葉裏迄、蒸し返されて輝やいてゐる。やがて、裏の納屋の方で鶏が大きな聲を出して、こけつこううと鳴く。

「おやもう。御午ですね。用事を忘れて居た。——久一さん、久一さん」

〔氣合もせぬ〕 けはひもせぬ。様子そぶりもない。〔音なふ〕 聲をかける意。

〔納屋〕 物置小屋。



女は及び腰になつて、立て切つた障子を、からりと開ける。内は空しき十疊敷に、狩野派の雙幅が淋しく春の床を飾つて居る。

「久一さん」

納屋の方で漸く返事がする。足音が襖の向でとまつて、からりと、開くが早い、白鞘の短刀が疊の上へ轉がり出す。

「そら御伯父さんの餞別だよ」

帯の間に、いつ手が這入つたか、余は少しも知らなかつた、短刀は二三度とんぼ返りを打つて、静かな疊の上を、久一さんの足下へ走る。作りがゆる過ぎたと見えて、ぴかりと、寒いものが一寸ばかり光つた。

〔狩野派〕 狩野元信の創めた畫派。初め狩野正信足利義政に仕へて近侍となり、畫を周文宗丹に學び、後畫師となり法眼に叙せられ、畫業を以て家職とした。その子元信、四五歳頃より畫を好み、長じて畫工を以て義政に近侍し、義政の薨後義澄に仕へ、義澄の薨後は諸國を遍歴し山川の勝景を寫す。其後土佐光信の女婿となり、繪所預となり、越前守に任ぜられ、また法眼に叙せらる。世に狩野畫派の宗と稱す。

〔雙幅〕 對幅、對軸、對になつた幅。

〔寒いもの〕 短刀の刃をいふ。刃の異名を秋水といふ。

十三

川舟で久一さんを吉田の停留場迄見送る。舟のなかに坐つたもの

〔御招伴〕 正客の相手となつて同じく饗應を受ける人。爰はおつきあひ。

は、送られる久一さんと、送る老人と、那美さんと、那美さんの兄さんと、荷物の世話をする源兵衛と、それから余である。余は無論御招伴に過ぎん。

御招伴でも呼ばれ、ば行く。何の意味だか分らなくても行く。非人情の旅に思慮は入らぬ。舟は筏に縁をつけた様に、底が平たい。老人の中に、余と那美さんが艫、久一さんと、兄さんが、舳に座をとつた。源兵衛は荷物と共に、獨り離れてゐる。

「久一さん、軍さは好きか嫌ひかい」と那美さんが聞く。

「出て見なければ分らんさ。苦しい事もあるだらうが、愉快な事も出て来るんだらう」と戦争を知らぬ久一さんが云ふ。

「いくら苦しくつても、國家の爲めだから」と老人が云ふ。

「短刀なんぞ貰ふと、一寸、戦争に出たくなりやしないか」と女が又妙な事を聞く。久一さんは



〔掀げ〕かゝげ。手で高くあげる。

〔委細構はず〕少しもかまはず。

「さうね」

と軽く首肯ふ。老人は髻を掀げて笑ふ。兄さんは知らぬ顔をして居る。

「そんな平氣な事で、軍が出来るか」と女は、委細構はず、白い顔を久一さんの前へ突き出す。久一さんと、兄さんが一寸眼を見合せた。

「那美さんが軍人になつたら嘸強からう」兄さんが妹に話しかけた第一の言葉は是である。語調から察すると、たゞの冗談とも見えな

い。「わたしが？ わたしが軍人？ わたしが軍人になれりや、とうになつてゐます。今頃は死んでゐます。久一さん。お前も死ぬがいゝ。生きて歸つちや外聞がわるい」

「そんな亂暴な事を――まあく目出度凱旋して歸つて来てくれ。」

死ぬ許りが國家の爲めではない。わしもまだ二三年は生きる積りぢや。まだ逢へる」

老人の言葉の尾を長く手繰と、尻が細くなつて、末は涙の絲になる。只男士にそこ迄はだまを出さない。久一さんは何も云はずに、横を向いて、岸の方を見た。

岸には大きな柳がある。下に小さな舟を繋いで一人の男が、頻りに垂綸を見詰めて居る。一行の舟がゆるく波足を引いて、其前を通つた時、此男は不圖顔をあげて、久一さんと眼を見合せた。眼を見合せた兩人の間には何等の電氣も通はぬ。男は魚の事ばかり考へてゐる。久一さんの頭の中には一尾の鮒も宿る餘地がない。一行の舟は靜かに太公望の前を通り越す。

日本橋を通る人の數は、一分に何百か知らぬ。もし橋畔に立つて行く人の心に蟠まる葛藤を、一々に聞き得たならば、浮世は目眩し

〔だまを出さない〕紙鳶を揚げる時徐々に糸を繰出すことを「だまを出す」といふ。爰は糸を出し切る意に言ひ、やがてそれを比喩に用ゐたもの、心の奥底まで出し切らぬこと。〔垂綸〕釣糸を垂れて魚を釣ること。爰は垂れた釣糸。

〔太公望〕呂尚のこと。東海上の人、窮困して年老い、渭水の濱に釣を垂れ、文王の獵をするに會うて周に仕へ、文王・武王を助けて殷を滅し天下を定め、後、齊に封ぜられた。よつて水邊に釣する人を太公望といふ。



くて生きづらからう。只知らぬ人で逢ひ、知らぬ人でわかれるから  
結句日本橋に立つて、電車の旗を振る志願者も出て来る。太公望が、  
久一さんの泣きさうな顔に、何等の説明をも求めなかつたのは幸で  
ある。顧り見ると、安心して浮標を見詰めて居る。大方日露戦争が  
済む迄見詰める氣だらう。

川幅はあまり廣くない底は浅い。流れはゆるやかである。舷に倚  
つて、水の上を滑つて、どこ迄行くか、春が盡きて、人が騒いで、  
鉢合せをしたがる所迄行かねば已まぬ。腥き一點の血を眉間に印  
したる此青年は、余等一行を容赦なく引いて行く。運命の繩は此青  
年を遠き、暗き、物凄き北の國迄引くが故に、ある日、ある月、あ  
る年の因果に、此青年と絡み付けられたる吾等は、其因果の盡くる  
所迄此青年に引かれ行かねばならぬ。因果の盡くるとき、彼と吾等  
の間にふつと音がして、彼一人は否應なしに、運命の手元迄手繰り

〔腥き一點の血云々〕眉宇  
の間に殺氣の迸つてゐる  
のをいふ。

寄せらるゝ。残る吾等も否應なしに残らねばならぬ。頼んでも、も  
がいても、引いて貰ふ譯には行かぬ。

舟は面白い程やすらかに流れる。左右の岸には土筆でも生えて居  
りさうな。土堤の上には柳が多く見える。まばらに、低い家が其間  
から藁屋根を出し。煤けた窓を出し。時によると白い家鴨を出す。  
家鴨があゝと鳴いて川の中迄出て来る。

柳と柳の間に的礫と光るのは、白桃らしい。とんかたんと機を織  
る音が聞える。とんかたんの絶間から女の唄が、はあゝい、いよう  
うーと水の上迄響く。何を唄ふのやら一向分らぬ。

「先生、わたくしの畫をかいて下さいな」と那美さんが注文する。  
久一さんは兄さんと、しきりに軍隊の話をして居る。老人はいつか  
居眠りをはじめた。

「書いてあげませう」と寫生帖を取り出して、

〔的礫〕テキレキ。鮮明な  
る貌。



〔そら解け〕 結んでゐる帯や紐などの自然と解けること。

春風にそら解け縹子の銘は何。と書いて見せる。女は笑ひながら、

「こんな一筆がきではいけません、もつと私の氣象の出る様に、丁寧にかいて下さい」

「私もかきたいのだが。どうもあなたの顔は、夫れ丈けぢや晝にならない」

「御挨拶です事。それぢや、どうすれば晝になるんです」

「なに今でも晝に出来ませんがね、只少し足りない所がある。それが出ない所をかくと惜しいですよ」

「足りないたつて、持つて生れた顔だから仕方がありませんわ」

「持つて生れた顔は色々になるものです」

「自分の勝手にですか」

「えゝ」

〔少し足りない所〕 前に「矢張那美さんの顔が一番似合ふ様だ。然し何だか物足りない云々」とある。

〔半分溶けた花の海〕 紫雲英に埋つてゐる田を「花の海」といひ、色の半褪せてゐるのを「半分溶けた」と言うたもの。  
〔崢嶸〕 サウクワウ。嶮しい貌。

「女だと思つて、人をたんと馬鹿になさい」

「あなたが女だから、そんな馬鹿を云ふのですよ」

「それぢや、あなたの顔を色々にして見せて頂戴」

「是程毎日色々になつてれば澤山だ」

女は黙つて向ふをむく。川縁はいつか、水とすれ／＼に低く着いて、見渡す田のものは、一面のげんげで埋つてゐる。鮮やかな紅の滴々が、いつの雨に流されてか、半分溶けた花の海は、霞のなかに果しなく廣がつて、見上げる半空には崢嶸たる一峯が、半腹から微かに春の雲を吐いて居る。

「あの山の向ふを、あなたは越して入らしつた」と女が白い手を舐から外へ出して、夢の様な春の山を指す。

「天狗岩はあの邊ですか」

「あの翠の濃い下の、紫に見える所がありませんか」



「あの日影の所ですか」

「日影ですかしら、禿げてるんでせう」

「なあに凹んでるんですよ。禿げて居りや、もつと茶に見えます」

「さうでせうか。とも角、あの裏あたりになるさうです」

「さうすると、七曲りはもう少し左になりますね」

「七曲りは、向ふへすつと外れます。あの山の又一つ先の山ですよ」

成程さうだった。然し見當から云ふと、あのうすい雲が懸つてるあたりでせう」

「えゝ、方角はあの邊です」

居眠をしてゐた老人は、舷から、肘を落して、ほいと眼をさます。

「まだ着かんかな」

胸先を前へ出して、右の肘を後ろへ張つて、左り手を真直に押し

て、うゝんと欠伸をする序に、弓を攣く真似をして見せる。女はホ

、と笑ふ。

「どうも是が癖で……」

「弓が御好と見えますね」と余も笑ひながら尋ねる。

「若いうちは七分五厘まで引きました。押しは存外今でも慥かです」

と左の肩を叩いて見せる。舳では戦争談が酣である。

舟は漸く町らしいなかへ這入る。腰障子に御肴と書いた居酒屋が見える。古風な縄暖簾が見える。材木の置場が見える。人力車の音さへ時々聞える。乙鳥がちゝと腹を返して飛ぶ。家鴨があゝ鳴く。一行は舟を捨て、停車場に向ふ。

愈現實世界へ引きすり出された。汽車の見える所を、現實世界と云ふ。汽車程二十世紀の文明を、代表するものはあるまい。何百と云ふ人間を同じ箱へ詰めて轟と通る。情け容赦はない。詰め込まれ

〔七分五厘〕 大弓の握りの幅をいふ。  
〔押し〕 弓を押しひろげる力。

〔乙鳥〕 いつてう。燕の異名。



た人間は、皆同程度の速力で、同一の停車場へとまつて、さうして同様に蒸氣の恩澤に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云ふ。余は積み込まれると云ふ。人は汽車で行くと云ふ、余は運搬されると云ふ。汽車程個性を輕蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を發達せしめたる後、あらゆる限りの方法によつて、此個性を踏み付け様とする。一人前何坪何合かの地面を與へて、此地面のうちでは寝るとも、起きるとも勝手にせよと云ふのが、現今の文明である。同時に此何坪何合の周圍に、鐵柵を設けてこれよりさきへは一步も出てはならぬぞと、威嚇かすのが現今の文明である。何坪何合のうちで自由を擅にしたものが、此鐵柵外にも自由を擅にしたくなるのは、自然の勢である。憐むべき文明の國民は、日夜に此鐵柵に噛み付いて咆哮して居る。文明は個人に自由を與へて、虎の如く猛からしめたる後、之を檻穽の内に投げ込んで、天下の平和

〔咆哮〕 吠えたける。  
〔檻穽〕 をりとおとし穴。

〔佛蘭西革命〕 十八世紀の末期に佛國に起つた政治上の大變革。  
〔イブセン〕 Henrik Ibsen (1828—1906) ノルウェーの劇詩人。「社會の柱」「人形の家」「人民の敵」などいふ作がある。

を維持しつゝある。此平和は眞の平和ではない。動物園の虎が見物人を眺めて、寢轉んで居ると同様の平和である。檻の鐵棒が一本でも抜けたら——世は滅茶々々になる。第二の佛蘭西革命は、此時に起るのであらう。個人の革命は今既に日夜に起りつゝある。北歐の偉人イブセンは、此革命の起るべき状態に就て、具さに其例證を吾人に與へた。余は汽車の猛烈に、見界なく、凡ての人を貨物同様に心得て、走る様を見る度に、客車のうち閉ぢ籠められたる個人と、個人の個性に、寸毫の注意をだに拂はざる此鐵車とを比較して、——あぶない、あぶない。氣を付けねばあぶないと思ふ。現代の文明は此あぶないで、鼻を衝かれる位充滿してゐる。おさき眞闇に盲動する汽車は、あぶない標本の一つである。

停車場前の茶店に腰を下ろして、蓬餅を眺めながら、汽車論を考へた。是は寫生帖へかく譯にも行かず、人に話す必要もないから、



だまつて、餅を食ひながら茶を飲む。

向ふの床几には二人かけて居る。等しく草鞋穿きで、一人は赤毛布、一人は千草色の股引の膝頭につぎ繼布をあて、繼布のあたつた所を手で抑へてゐる。

「矢つ張り駄目かね」

「駄目さあ」

「牛の様に胃袋が二つあるといふなあ」

「二つあれば申し分はないさ、一つが悪くなりや、切つて仕舞へば濟むから」

此田舎者は胃病と見える。彼等は滿洲の野に吹く風の臭ひも知らぬ。現代文明の弊をも見認めぬ。革命とは如何なるものか、文字さへ聞いた事もあるまい。或は自己の胃袋が一つあるか、二つあるか夫すら辨じ得んだらう。余は寫生帖を出して、二人の姿を描き取つ

た。

ぢやらん／＼と號鈴が鳴る。切符は既に買ふてある。

「さあ、行きましたよ」と那美さんが立つ。

「どうれ」と老人も立つ。一行は揃つて改札場を通り抜けて、プラットホームへ出る。號鈴がしきりに鳴る。

轟と音がして、白く光る鐵路の上を、文明の長蛇がうね蜿蜒て来る。文明の長蛇は口から黒い烟りを吐く。

「愈御別れか」と老人が云ふ。

「それでは御機嫌よう」と久一さんが頭を下げる。

「死んで御出で」と那美さんが再び云ふ。

「荷物は來たかい」と兄さんが聞く。

蛇は吾々の前をとまる。横腹の戸がいくつもあく。人が出たり、這入つたりする。久一さんは乗つた。老人も兄さんも、那美さんも、



余もそとに立つてゐる。

車輪が一つ廻れば、久一さんは既に吾等が世の人ではない、遠い、遠い世界へ行つて仕舞ふ。其世界では烟硝の臭ひの中で、人が働いて居る。さうして赤いものに滑つて、無暗に轉ぶ。空では大きな音がどどん／＼と云ふ。是からさう云ふ所へ行く久一さんは、車のかに立つて無言の儘、吾々を眺めて居る。吾々を山の中から引き出した久一さんと、引き出された吾々の因果はこゝで切れる。もう既に切れかゝつて居る。車の戸と窓がゐて居る丈で、御互の顔が見える丈で、行く人と留まる人の間が、六尺許り隔たつて居る丈で、因果はもう切れかゝつてゐる。

車掌がびしやり／＼と戸を閉てながら、此方へ走つて来る。一つ閉てる毎に、行く人と、留る人の距離は益々遠くなる。やがて久一さんの車室の戸も、びしやりとしまつた。世界はもう二つに爲つた。

「赤いものに滑つて」 屍山  
血河の中に働くのをいふ。

老人は思はず窓側へ寄る。青年は窓から首を出す。

「あぶない。出ますよ」と云ふ聲の下から、未練のない鐵車の音がごつとり、ごつとりと調子を取つて動き出す。窓は一つ一つ、余等の前を通る。久一さんの顔が小さくなつて、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、又一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽子の下から、髯だらけの野武士が、名残り惜氣に首を出した。そのとき那美さんと野武士は、思はず顔を見合せた。鐵車はごとり／＼と運轉する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも、今迄かつて見た事のない「憐れ」が一面浮いてゐる。

「それだ！ それだ！ それが出れば晝になります」

と余は那美さんの肩を叩きながら、小聲に云つた。余が胸中の晝面は此咄嗟の際に成就したのである。(終)

「憐れが云々」前に「憐れ」と云ふ字のあるのを忘れてゐた……此情があつた女の眉宇にひらめいた瞬間にわが晝は成就するであらう」とあるに照應するのである。



## 夏目漱石略傳

慶應三年一月六日、牛込區喜久井町なる舊家の第三子に生る。金之助と命名、市ヶ谷小學校に入學し、後ち神田の錦華小學校に轉ず。同校卒業後一つ橋中學校に入りしが、業を卒へずして退き、三島中州翁の二松學舎に入りて漢學を學ぶ。

明治十七年、一時建築を學ばんがために大學豫備門の工科に籍を置きしが、後志を轉じて文科に入る。

同二十三年、大學英文科に入學。其頃正岡子規と交り俳句と漢詩とを作る。

同二十六年七月、大學英文科を卒業して、大學院に入る。同期生他になし。高等師範學校の囑託に應じ一ヶ年間同校に教鞭を取る。

同二十八年四月、正岡子規の介する處によりて伊豫松山の中學に赴任す。後年の「坊ちやん」は此の時に得たる題材なりと云ふ。

同二十九年、熊本第五高等學校教授に任ぜられ、高等官六等正七位に叙せらる。後間も



なく高等官五等となり。従六位に叙せられたり。

同年、熊本に於て夫人鏡子と婚す。

同三十二年、長女を擧ぐ。

同三十三年九月、英國倫敦に留學を命ぜらる。

同三十六年一月歸朝、四月東京帝國大學講師となり英文學を講ず。兼ねて第一高等學校講師たり。

同三十七年、雜誌「ホト、ギス」に「倫敦消息」を連載す。倫敦留學中、病子規を慰めんがために執筆せるものなり。

同三十八年、「吾輩は猫である」上巻を大倉書店より上梓す。虚子らに勧められて雜誌「ホト、ギス」のために連載せる、處女作小説なり。發表即日よりして文名大に揚る。

同三十九年、「漾虚集」を大倉書店より出版。「倫敦塔」「カアライル博物館」「琴之空音」「幻影の楯」「一夜」「薙露行」「趣味の遺傳」等の短篇を収む。「鶉籠」を春陽堂より出版。「坊ちゃん」「二百十日」「草枕」の三篇を集む。「吾輩は猫である」の中巻を大倉書店より出

版す。

同四十年四月、帝國大學講師、及び第一高等學校講師を辭し、朝日新聞社の招聘に應じて入社。直ちに長篇「虞美人草」を同紙に連載す。此年長男を擧ぐ。吾輩は猫である」の下巻を出版。又「文學論」を春陽堂より上梓す。

同四十一年、「草合」を春陽堂より出版。「坑夫」と「野分」とを収む。

同四十二年「三四郎」及び「それから」を春陽堂より出版す。「虞美人草」「坑夫」に次いで何れも朝日紙上に連載せしものなり。「文學評論」を春陽堂より上梓す。

同四十三年春、滿韓に遊び、紀行文「滿韓ところく」を朝日紙上に掲ぐ。「四篇」を春陽堂より出版。滿韓ところく」及び「文鳥」「永日小品」「夢十夜」等の短篇小品集なり。次で「門」を春陽堂より出版、「三四郎」「それから」と共に三部作となす。

同年八月、修善寺に旅行して胃潰瘍を病み一時危篤に瀕す。「思ひ出す事など」は、當時の追想録なり。

四十四年正月、文學博士號を授けられたるも是を受けず。爲めに物議を醸す。「切抜帖よ



り」を春陽堂より出版、「思ひ出す事など」外數篇の隨筆を輯せしものなり。

大正元年、「彼岸過迄」を春陽堂より出版す。

同二年、「行人」を大倉書店より出版す。

同三年、「心」を岩波書店より出版す。

同四年、「硝子戸の中」を岩波書店より出版す。小品隨筆集なり。「道草」を岩波書店より出版す。

同五年五月二十六日より朝日紙上に「明暗」を連載し來り、回を重ねる事百八十八、遂に完結に至らず、十二月九日午後六時四十分再度の胃潰瘍を以て長逝す。享年五十歳文獻院古道漱石居士を諱る。(新小説所載)

### 森田米松氏への書翰 (明治三十九年九月三十日)

草枕の主張が第一に感覺的美にある事は貴説の通りである。感覺的美は人情を含みぬものである(見る人から云うても見られる方から云うても)

(一)自然天然は人情がない。見る人にも人情がない。雙方非人情である。只美しいと思ふ。是は異議がない。

(二)人間も自然の一部として見れば矢張り同じ事である。

(三)人間の情緒の活動するときは活動する人間は大に人情を發揮する。見る人は三様になる。

(a)全く人情をすてゝ見る。松や梅を見ると同様の態度(是は一ト二ト同じ事に歸着する。)

(b)全く人情を棄てられぬ。同情を起したり。反感を起したりする。然し現實世界で同情したり反感を起したりすると異なる場合。即ち自己の利害を打算しないで純粹な



る同情と反感の場合。(吾人が普通の芝居を見る場合)

(c) 現実世界で起す同情と反感を起して人間の活動を見る場合(此場合が芝居杯へ切り込むと時々見物人が舞臺へ飛び上がつて役者をなぐつたり杯する。フランスで兵士の見物がオセロを拳銃で打つた事がある)

草枕の畫工の態度で異議のある所は第三であるからして第三の(a)か(b)か(c)かをきめて見ればよい。(c)では無論ない。畫工は可成(a)で見ようとする。よし(a)丈で見られないでも全然(b)になつてはもういやだと云ふ男である。だから、一步を譲つて(a)を離れても(b)迄は飛ばない。(a)と(b)の中間位である。

(5) 「憐れ」が表情になつて女の顔にあらはれるのが(a)で見て居られぬ事はない。「憐れ」の表情が感覺的に畫題に調和するか。又はそれ自身に於て氣持がよい表情かわるい表情か、換言すれば單に美か美でないかと云ふ點からして觀察が出来る。(畫工が此態度で居れば「憐れ」といふのが人情の一部でも、觀察の態度は矢張り純非人情である)

(ろ) 女の顔に憐れが出て夫が亭主の爲めに出たのだから感心である。大いに同情を寄す

べき女である。見上げたものである。従つて畫工も思はず憐れを催した。——かうなると普通の芝居の心持ちである(草枕の畫工は多分こゝ迄は人情的になつて居るまいと思ふ)

(は) 憐れが出たので矢張り亭主に未練がある。未練があるとすれば畫工にはそれ丈冷淡であつた。なんだ馬鹿々々しい。今迄はおれに惚れて居たのと思ふのが現實界の態度である。此場合には自己の利害の爲めに亂さるゝからして結構な女の心行きが却つてにくらしくなる。(草枕の畫工は無論こゝには居らぬ)

沙翁がハムレットをかく時の了見は分らないが、(い)ではないに極つて居る。(は)でもあるまい、恐らくは(ろ)であらう。(即ちハムレットを見る觀客の起す了見と同一であつたらう)

従つて草枕の畫工の態度と沙翁とは違ふ。截然として區別がつかぬかも知れぬが傾向が違ふ。

沙翁は(ろ)に住する傾向がある、畫工は(い)にもどる傾向がある。(5)と(ろ)をならべて矢で方向を示すと沙翁の態度は……である。



畫工の態度は↑である兩方とも離れたがつて居る。

畫工は非人情<sup>○</sup>的である。沙翁は純人情<sup>○</sup>的である。而して吾々日々夜々パンに汲々として喧嘩をしてくらす人間は俗人情<sup>○</sup>的である。

作家は作家の考がある通り批評家の見識がある。君の云ふ事は僕の考で毫も曲ぐべき必要はない。只考文を云ふ迄である。

畫工は紛々たる俗人情<sup>○</sup>を陋とするのである。ことに二十世紀の俗人情を陋とするのである。否之を陋とするの極純人情たる芝居すらもいやになつた、あき果てたのである。夫だから非人情の旅をしてしばらくでも飄浪しようといふのである。たとひ全く非人情で押し通せなくても、尤も非人情に近い人情（能を見るとき<sup>○</sup>の如き）で人間を見やうといふのである。

昭和三年四月十日印刷  
昭和三年四月十五日發行  
昭和七年十月三日改訂再版

新註版

定價金八拾錢

不許複製



編者

竹野長次

發行者

北村宇宙

印刷所

精興社

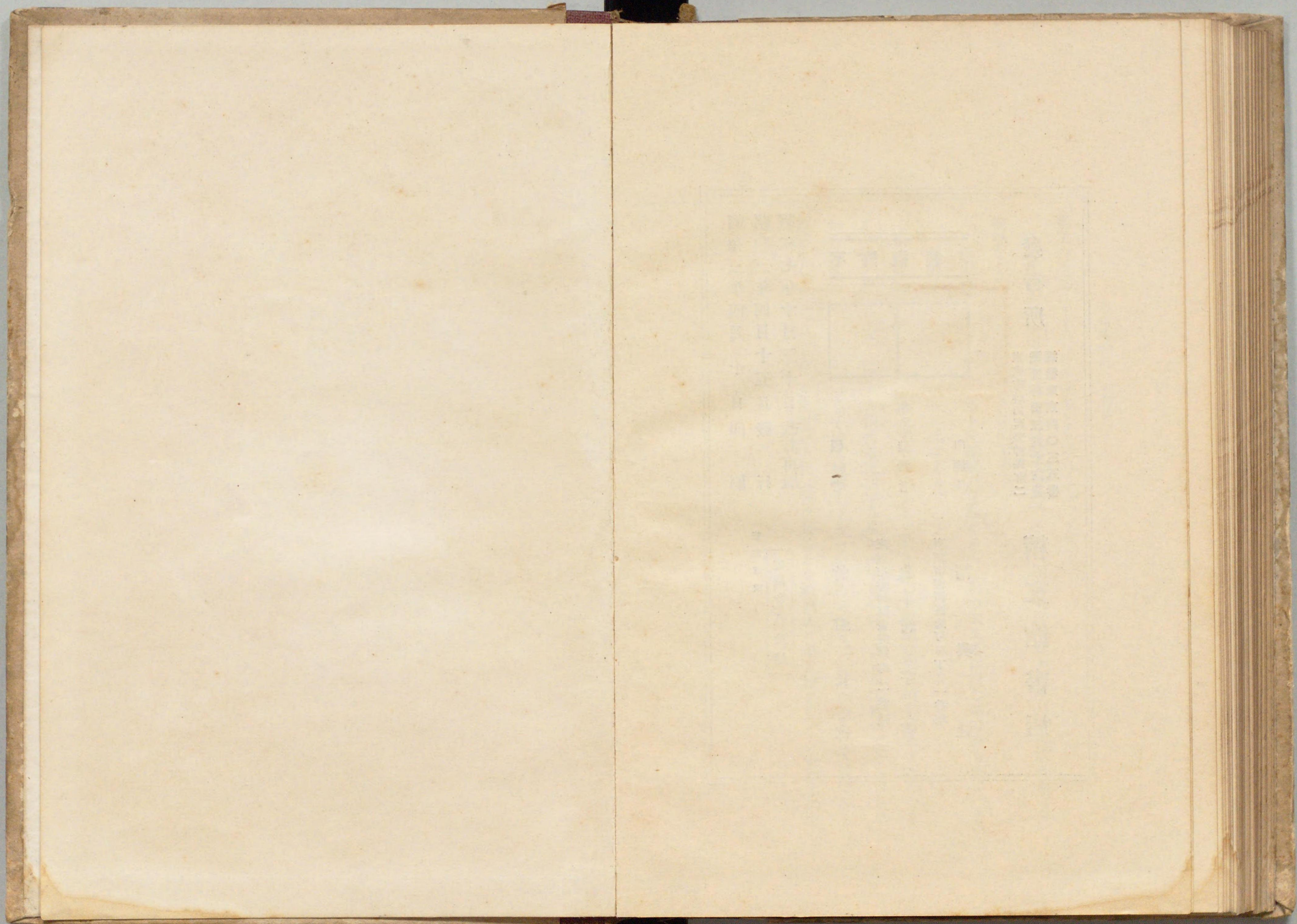
發行所

東京市神田區表神保町二  
電話神田三六七六番  
振替東京四〇三五番

精文館書店

東京市神田區表神保町二番地  
東京市神田區錦町三丁目一番地







土  
3017  
2  
3

60



